



まちのボランティア

普段着の天使たち

岩室村婦人会奉仕部が温泉病院でボランティア

細くても長く

十二月の当番として先月三日、温泉病院を訪れたのは、大沢ハツ子さん（油島）をリーダーに近藤テルさん（油島）、本間ケイ子さん（西中）、島崎セツさん（和納十一区）、中村須美子さん（和納六区）の五人のグループ。

午後一時半、看護婦の後藤和子さんの案内で担当病室に振り分けられたみなさんは、慣れた手つきで仕事を開始。三か月ぶりに訪れた病室も「勝手知ったる何んことやら」で患者の身の回りの世話や洗濯、入浴の手伝いもスムーズにこ



「リハビリに頑張っている人が一日も早く元気になるてくれたら——そんな願いを込めて、岩室村婦人会（中原ミヨ会長）では、昭和五十七年から毎月一回、リハビリ施設を持つ岩室温泉病院（寺井元一院長）を訪れ、入院患者の身の回りの世話や衣類の洗濯、入浴の手伝いなど地道な活動を続けています。

奉仕部というこのボランティア事業部に所属している人は現在二十二名。一班から三班に分かれ各班約七人編成で毎月一回、順番に第一水曜日ともなると同病院を訪れ、約二時間の奉仕活動にがんばっています。

この活動が始まったのは、五十七年に岩室村婦人会が再編成されたときからという。「地域社会にいくらかでも力になれば」と奉仕部が結成されました。



なす。患者のみなさんが心待ちにしているのが本当にうれしくて」（島崎さん）。「何度も通うと、かえってむりしないでね、なんて患者からやさしい言葉をかけられ、こちらの方がジーンと熱くなりませす」（中村さん）。「ほんの数時間の活動ですが、お世話するみなさんから喜んでもらえるのが何よりの励みです。細くてもいいから長く続けていきたいですね」とリーダーの大沢さん。また、「広報に紹介されて、部員の中に義務感みたいなものが出なければいいんですが」と部員を思いやる大沢さんの言葉に、普段着のつき合いで心の交流を続ける奉仕部のみなさんの姿勢がみえる。広報では書き表せない情熱を感じた。



「月一回ということで、当日都合が悪いとパスする状況もありますが、患者（とくにお年寄り）のみなさんが心待ちにしてくるので」と都合を変更して通う人も多いという。

仕事は入院患者の中でも、自力で起きたり歩いたりすることが困難な人を対象に、ベッド周りの清掃や入浴の手伝い、パジャマなど衣類の洗濯——とボランティアというより主婦業の延長としてとらえ活動しています。

とくにお年寄りに好評なのが話し相手になることとか。長い入院生活で家族の面会も滞りがちな患者にとっては、じっくり話を聞いてくれることが何よりの療養とか。出身地の話から趣味の話、身上相談まで幅広い話に耳をかたむけ、受け応えてくれるボランティアのみなさんは、まさに「普段着の天使」に見えるのではないのでしょうか。

飾り気のない親しみあるボランティアの婦人たちの世話に手を合わせ、感謝していたおばあちゃんの姿が印象に残ります。



岩室温泉病院 病院長 寺井元一さん

岩室の皆さんは親切ですね

当病院にはいま、およそ180人の患者が入院しています。このうちベット生活が長く自分の力だけでは、起きたり歩いたりすることが困難な人も少なくありません。私どものヘルパーも毎日それらの患者の世話を行っています。岩室村婦人会の皆さんには、昭和57年ころから毎月一回、ボランティアとして患者の身の回りの世話や洗濯、ベッドサイドでの話し相手など心の交流を通したお手伝いをしていただき、患者さんから大変喜ばれています。みなさん気が負ったところがなく、そんな点が世話を受ける患者らに好評な原因でしょうか。また、村老人クラブの皆さんには毎月、心の込めた手作りの生花をいただき、とかく殺風景になりがちな病室を飾っていただきうれしく思います。婦人会の皆さんそして老人クラブの皆さんの活動から「岩室の人は本当に親切だな」とつくづく感じています。皆さんの温かいご協力とご厚情に対し、深く御礼申し上げます。

● 岩室温泉病院 ●

岩室温泉病院は正規名「社団法人新潟県労働衛生医学協会附属岩室温泉病院」といいます。創立は昭和45年7月27日。旧岩室西小学校跡に誘致されました。創立当初は交通事故などのリハビリテーションセンターとしてスタートしま

したが、現在は内科、理学療法科、歯科の4科となりベット数も180床となりました。スタッフは医師19人（非常勤を含む）、総職員112人です。また、同病院は岩室健康増進センターが併設され、人間ドックも有名。岩室温泉の湯を引いた療養浴室もあり好評です。

